

天狗のまな板石 (奈良)

むかし、ある高い山の頂上ちやうじやうに天狗てんぐがすんでいました。

あるとき、村の男の人が山を歩いていました。ちょうど頂上まで来かかると、天狗があらわれて、

「おい、おれの碁ごの相手をしないか」とさそいました。緋衣ひしろうもをまとった、赤い高い鼻の大きな天狗です。男は、恐ろおそしくてことわれず、碁の相手をしました。

天狗はとても強くて、男は負けてばかりです。天狗は、

「おまえ、弱いなあ。もうすこし強くなれよなあ」といいます。けれども、打っても打つても、男が負けません。負けると腹はらがたつて、恐いのもわすれて、

「もう一番」

「もう一番」と、意地になって碁を打っていました。

けれども、そのうち、いちど家に帰ろうと思いました。

男が山を下くだって家のそばまで帰ってくると、家におおぜいの人が集まっているのが見えましました。そして、和尚かねさんが、鐘かねをコーンコーンとたたきながら、念仏ねんぶつをあげています。男が、

「なにしてるんだ」とたずねると、家の人が、

「うちの主人しが死んで、三十五日の法事ほふしをしています」といいながら出てきました。そして、ひよつと男の顔を見ると、死しんだはずの主人ではありませんか。家の人は、びっくりして、

「あんた、いったいどうしたんだい」とさげびました。男は、まるできつねにつままれようです。

「おれは、山へ行って、今まで天狗と碁を打ってたんだぞ」

いつの間まにやら、三十五日たつてしまっていたのでした。

その山の頂上には、今でも、天狗が碁を打った石があります。まな板石まないたといって、大きなまっ白い平たい石です。